

<p>2 現行授業の目標と教育効果及びそれに対する自己評価</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>担当しているすべての科目にかかわる「健康」とは、「病気ではないとか、弱っていないということだけではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること(WHO)」と定義されている。乳幼児期の健康はヒトが生きていくための基礎であり、保育者を指す人はその健康な生活の基盤をどのように育てるかを学ぶことが求められる。同時に自身の健康についても学び、考える機会が必要であると考え。そこで、領域健康や保育内容Ⅲ(健康)では、乳幼児期の子どもの発育発達や生活習慣・安全についての知識とともに、乳幼児期の子どもにおける運動あそびの重要性やそれにかかわる指導などの技術を伝え、学生が実習や現場で活用できるように身に付けることを目標としている。一方、体育実技や体育講義では、学生自身が運動・スポーツに楽しく触れる機会の提供や健康や運動に関する知識を身に付けることを目標としている。いずれの講義科目も運動遊びを含めた実技が多くなるため、学生がさまざまな実技種目に楽しさを見出せるような工夫を心掛けた。さらに、学生自身が子ども向けの運動遊びを考案する内容を組み込み、学びを深められるよう展開してきた。</p> <p>令和4年度についてもおおむね先で述べたような目標は達成できたと感じている。体育館にて実技の前後に健康に関する内容をまとめたものを配布し、その場で具体例など挙げながら話をし、座学のみにならないよう話の内容に可能な限り関連する実技を行った。実技においては、既存のスポーツ実施で起こりうる技術の差の影響を考慮し、高等な技術はさほど必要がなく、比較的誰でも楽しめるような種目を選択した。そのことにより、もともと“体育嫌い”という学生が運動・スポーツを楽しんだり、一生懸命取り組んだりする様子がみられた。また、シャトルノートを活用したことにより、学生の学習状況やつまずき、求めていることなどを小まめに把握できたため、次年度以降も続けていきたい。一方で、保育者として身近な教材である器械運動やボール運動など苦手意識を持つ学生が多いと感じたが、苦手意識克服のためのアプローチ不足だったため、改善を図りたい。</p>																				
<p>3 学生による授業評価も踏まえ、教育改善への取り組み</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>主に担当している科目ほとんどにおいて実施しているシャトルノートでは、普段直接言えない意見や技術面で指導を求める部分など学生個人が感じていることを知ることができた。反対に、シャトルノートを介して学生の疑問等に答えるなど双方向のコミュニケーションは図れていたことは評価されている。</p> <p>講義内で運動遊びを多く取り入れてはいたが、扱いきれない運動遊びがあり、幅広い種目の選定が必要であった。さらに、苦手意識の多い器械運動を実施した際のコツ指導が充実していなかったことも反省点である。これらのことは、体育実技の講義の最終回に個人的に実施したアンケート調査にも影響しており、「自分が出来ないから」という理由で子どもに運動指導など行うことが不安だと回答した学生が多かった。この「出来ない」を改善するためには一定の技術指導は必要であると改めて感じたため、次年度以降工夫して組み込んでいきたい。体育講義については学期中に進度が早いという指摘を受けたため、ゆっくり進めるよう心掛けたが、次年度以降は情報量を精査し、学生たちが聞きやすいような内容に改善していきたい。</p>																				
<p>4 教科書、教材の作成状況</p> <p>(記述式：300字以内)</p>	<p>現在、主に担当している科目では特定の教科書を扱うのではなく、独自に作成したプリントを配布したり、スライドを作成したりすることで講義を進めている。子どもの体力・運動能力に関するデータや社会背景の変容、情報など日々更新されていくものを講義内容に反映させることが可能である。さらに、そのプリントをシャトルノートに貼付し、その日の講義内容について振り返りを記入してもらうことで、そのシャトルノートが健康・運動などを含めた参考書のようなものになることを期待している。</p>																				
<p>5 学生の指導(課外活動・厚生補導等)</p> <p>(主要10件以内)</p>	<table border="1"> <tr> <td>2019年4月～現在</td> <td>バドミントン部顧問</td> </tr> <tr> <td>2021年10月～12月</td> <td>幼児の体力・能力調査を実施</td> </tr> <tr> <td>2022年10月～</td> <td>学生広報部「ぶれたく」発足・活動開始</td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> </table>	2019年4月～現在	バドミントン部顧問	2021年10月～12月	幼児の体力・能力調査を実施	2022年10月～	学生広報部「ぶれたく」発足・活動開始														
2019年4月～現在	バドミントン部顧問																				
2021年10月～12月	幼児の体力・能力調査を実施																				
2022年10月～	学生広報部「ぶれたく」発足・活動開始																				
<p>6 その他</p> <p>(主要5件以内)</p>	<table border="1"> <tr> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> </tr> </table>																				
研 究 業 績																					
<p>1 研究分野・活動</p> <p>(記述式：350字以内)</p>	<p>子どもの体力・運動能力の低下は長い間問題とされており、全国の学校現場では体づくりの授業の充実が図られるなど、対策が行われている。その努力から毎年実施されている新体力テストの結果をみると、特に小中学生では体力・運動能力の向上あるいは維持されていることが報告されている。しかしながら、ヒトとしての基本的動作を身に付ける大切な時期である乳幼児期の子どもの体力・運動能力についてはいくつか研究報告はされているが、未だ十分ではないため、基礎的なデータを収集する必要がある。</p> <p>さらに、乳幼児期の子どもの体力・運動能力向上を図るためには身近な存在である保育者が運動に対して積極的である必要がある。そのためには、現在ある“運動嫌い”“体育嫌い”の学生を一人でも減らすことが重要であると考え。</p>																				

2 研究課題 (今後の展開・可能性を含む) (記述式：350字以内)	1「北海道における乳幼児期の子どもの体力・運動能力」 2「保育者志望学生の運動に対する意識向上への一考察」 1のテーマについては、2021年度3つの園に調査を依頼し実施、対象幼児は平成27年度の北海道の幼児の体力データと比較して、劣っていたことがわかった。さらにデータ収集できるよう、協力してくれる園をみつけたい。次年度更なる調査を広げたい。 2のテーマについては、数年前にプレアンケートを実施済みであるため、その結果を集約し検討・考察を行い、反省を反映した上で次年度改めてアンケート調査を実施していく。さらに、授業の中でも工夫を行い、報告できるよう進めていきたい。なお、プレアンケートの結果については本学保育学科の紀要に投稿した。今年度以降で発展させたい。			
3 研究助成等 (主要5件程度)	(1)文部科学省科学研究費 なし (2)学内 なし (3)学外 なし			
4 資格・特許等 (主要3件以内)	2012年3月 小学校教諭一種免許(北海道教育委員会 平23小1第323号) 2022年4月 幼少年体育指導士(一般社団法人 幼少年体育指導士会 第22-1227号) 2023年4月 保育実習指導者認定(一般社団法人 全国保育士養成協議会主催)			
著書、学術論文、作品等の名称 (主要15件以内)	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行又は発表 雑誌等又は発表 学会等の名称	要 約
(学術論文) 幼児の「表現」領域に関する教育課程の日韓比較—身体表現に着目して—	共著	2020年2月	札幌学院大学人文学会紀要107	両国ともに「表現」領域の基本的なねらいは類似し、身近な環境と十分に関わることで豊かな感性や自分の考え、感じたことを自由表現できるように教育課程の内容を構成していた。韓国では3～5歳の年齢別に細部内容が例示されていたが、日本は内容について解説はされていたものの何歳でその内容を行うかについては各園に委ねていた。 著者：秋月茜、塚本未来、木本理可、神林勲 (共同研究により抽出不可：研究デザインを構築し、主たる内容を執筆)
北海道マラソンランナーの走行距離および練習頻度の変化と身体の痛み	共著	2019年8月	ランニング学 研究VOL.30 NO.2	道内ランナーにおいて、冬期間にも練習量を多く確保することや走行距離を夏期間に向けて徐々に増加させるなど、季節によって走行距離を大きく変えないことが身体の痛みの出現を抑える対策の一つになると考えられた。(pp:219-226) 著者：秋月茜、井上恒志郎、山口明彦 (共同研究により抽出不可：研究デザインを構築し、主たる内容を執筆)
食とあそび行動のESDプログラムに関する実践的研究—「二歳児・ほっちゃん」の塩造りの事例より—	共著	2019年2月	藤女子大学人間生活学部保育学紀要第2号	幼児期における食育の実践事例として、2歳児を対象に「食とあそび行動のESDプログラム」の事例を報告するものである。ESDプログラムの五感に訴える体験的な活動は、2歳児の健康的な生活リズムの形成を促す可能性が高いことが示唆された。また、教育的遊戯論の意味を考究するESDの循環型体験的学習は、子どもの主体的な学びを引き出すことが明らかとなった。(pp:49-55) 著者：木本理可、秋月茜、神林勲、城後豊 (共同研究により抽出不可：考察とその執筆を担当)

<p>子どもと親の基本的生活習慣の関係性について—ほっかいどう「子育て支援メソッド」形成事業における子育て支援のアンケート調査の結果より—</p>	<p>共著</p>	<p>2019年2月</p>	<p>藤女子大学人間生活学部保育学紀要第2号</p>	<p>幼稚園教育要領等に基づく幼児期の日常生活の指導を踏まえ、子どもの基本的生活習慣の形成と保護者（家庭）との関わりについての考察である。領域「健康」「人間関係」「環境」の各指導内容とその関連を踏まえ、子ども同士の適切な関わりを基盤に、保護者への子育て支援の計画的な取組みが重要となる。また、園外での取組みとして、地域コミュニティの有効性についても示唆した。(pp:40-47) 著者：木本理可、秋月茜、神林勲、城後豊 (共同研究により抽出不可：アンケート調査の内容検討と結果分析、考察部分の執筆を担当)</p>
<p>保育士を目指す大学生が考える幼児期における運動遊びの重要性について—運動習慣および運動嗜好に着目して—</p>	<p>共著</p>	<p>2019年2月</p>	<p>藤女子大学人間生活学部保育学紀要第2号</p>	<p>幼児期における食育の実践事例として、2歳児を対象に「食とあそび行動のESDプログラム」の事例を報告するものである。ESDプログラムの五感に訴える体験的な活動は、2歳児の健康的な生活リズムの形成を促す可能性が高いことが示唆された。また、教育的遊戯論の意味を考究するESDの循環型体験的学習は、子どもの主体的な学びを引き出すことが明らかとなった。(pp:56-61) 著者：木本理可、渡辺まや、秋月茜、塚本未来、神林勲 (共同研究により抽出不可：アンケート調査の内容検討と結果分析、考察部分の執筆を担当)</p>
<p>北海道における大学生の体力・運動能力とロコモに関する実態調査</p>	<p>単著</p>	<p>2019年2月</p>	<p>札幌学院大学人文学会紀要105</p>	<p>幼児期の発育発達の偏りや食生活が原因と考えられる運動器の障害や日常生活上の支障に着目し、大学生のロコモティブシンドローム（以下、ロコモとする）度からの考察である。その結果、特に女子学生において幼少期のロコモの傾向（ロコモ予備群との推測によるものも含む）は、現状の体力・運動能力面の問題とロコモ状態に強く関連していることが明らかになった。(pp:103-115) 著者：秋月茜</p>
<p>北海道の小学校で用いられている短距離走のスタンディング・スタートについての研究（I）—大学生を対象とした小学校時代についてのアンケート調査から—</p>	<p>共著</p>	<p>2018年2月</p>	<p>北海道教育大学紀要教育科学編68(2)</p>	<p>短距離走のスタンディング・スタートにおいての「腕の入れ替え」動作を『用意』において実施することには地域性が存在するのではないかと考え、大学生を対象にアンケート調査を実施したところ、小学校6年間を札幌市で過ごした学生の71%が『用意』において「腕の入れ替え」動作を行っていた。(pp：595-601) 著者：神林勲・中島寿宏・木本理可・秋月茜・神林裕子・石澤伸弘 (共同研究により抽出不可：アンケート調査の内容検討と結果分析、考察部分の検討)</p>
<p>児童における起床時体温と体力・運動能力との関係</p>	<p>共著</p>	<p>2017年8月</p>	<p>北海道体育学研究52</p>	<p>起床時体温の高低は、幼児期の運動習慣の有無、睡眠や食事内容などの基本的な生活習慣との関連が推測された。特に、起床時低体温群は持久力と関係する20mシャトルラン等が顕著に低かった。その改善の具体として、幼児期の発達特性に応じた食育指導、年齢や体格に応じた運動機能の特徴をふまえた「運動遊び」の指導内容と指導法の改善が挙げられる。(pp：1～7) 著者：須合幸司、神林勲、森田憲輝、奥田知靖、志手典之、秋月茜、新開谷央 (共同研究により抽出不可：各データ分析及び新体力テストとの比較検討)</p>

<p>Study on physical fitness and athletic ability of elementary school students in Korea and Japan : From the comparison of the exercise habits survey</p>	<p>共著</p>	<p>2017年1月</p>	<p>The Korean Journal of Physical Education, 56(1)</p>	<p>韓国の子どもは体力・運動能力の総合力を示す体力合計点が日本の子どもよりも低かった。運動に対する好感度は日本同様高かったものの、日常の身体活動時間は少なかった。社会環境など日本とは子どもを取り巻く状況が異なる韓国在住の子どもにとっては、身体活動能力を身に付けられるよう、幼児期からの運動習慣の改善が重要であることが示唆された。 (pp : 837~847) 著者 : Akane AKIZUKI, Isao KAMBAYASHI (共同研究により抽出不可: 研究デザインを構築し、主たる内容を執筆)</p>
<p>北海道における児童・生徒の肥満度と体力・運動能力の関係</p>	<p>共著</p>	<p>2015年10月</p>	<p>北海道体育学研究 50</p>	<p>北海道の肥満群に分類される児童・生徒は、総合的な体力・運動能力が低く、特に体重が負荷となる種目において顕著に劣ることが明らかとなった。また、肥満や痩身に分類される児童・生徒を除いた標準群の体力・運動能力は、全国平均値と有意差は認められなかった。(pp : 53~60) 著者 : 秋月茜、神林勲、森田憲輝、奥田知靖、志手典之、石澤伸弘、中道莉央、中島寿宏、新開谷央 (共同研究により抽出不可: 研究デザインを構築し、主たる内容を執筆)</p>
<p>(学会発表)</p>				
<p>北海道マラソンランナーの走行距離および練習頻度の変化と身体の痛み</p>	<p>共著</p>	<p>2021年3月</p>	<p>第33回 ランニング学会 2019年度優秀賞講演</p>	<p>北海道内ランナーでは冬期間、夏期間ともに走行距離が長いほど身体の痛みの発生率が高くなった。このことから、走行距離がランナーの障害に関連していることが示された。道内ランナーは冬期間から夏期間にかけて痛みの発生率が増加することが認められ、特に冬期間と夏期間の走行距離の変化が90km以上あるランナーは身体の痛みの発生率が高くなった。これらのことから、道内ランナーにおいて、冬期間にも練習量を多く確保することや走行距離を夏期間に向けて徐々に増加させるなど、季節によって走行距離を大きく変えないことが身体の痛みの出現を抑える対策の一つになると考えられた。 著者 : 秋月茜、井上恒志郎、山口明彦 (共同研究により抽出不可: 研究デザインを構築し、主たる内容を執筆)</p>
<p>北海道の子どもにおける総合学習での健康授業の有無が冬季休業後の体力レベルに与える影響</p>	<p>共著</p>	<p>2019年9月</p>	<p>日本体育学会 第70回大会</p>	<p>小学生における総合学習での健康授業の実施は、北海道における冬季休業中の体力低下に対して全身性および局所性の持久力を中心に効果がある可能性が示唆された。 著者 : 木本理可、秋月茜、塚本未来、内田英二、神林勲 (共同研究により抽出不可: 各データ分析及び比較検討)</p>
<p>北海道マラソンに出場した男性ランナーにおける障害部位とパフォーマンスの関係</p>	<p>共著</p>	<p>2018年12月</p>	<p>平成30年度 北海道体育学会 第58回大会</p>	<p>マラソンランナーの過去の障害経験やその部位とパフォーマンスとの関係について明らかにすることを目的とした。膝に痛み経験を有するランナーはマラソンのハーフまでの到達率が低かった。一方で、腰に痛み経験を有するランナーはフル完走率やハーフ到達率に影響はないが、完走タイムと目標タイムの差が有意に大きいという結果がみられた。(予稿集p:30) 著者 : 秋月茜、井上恒志郎、山口明彦 (共同研究により抽出不可: 研究デザインを構築し、主たる内容を執筆)</p>

日韓小学生の体力・運動能力および運動・生活習慣の国際比較	共著	2015年9月	第70回日本体力医学会大会	日本児童の体力に関する問題改善に資することを目的に、日韓の児童の体力測定および運動・生活習慣の調査を行った。その結果、体格は日本が有意に低値であった。一方、体力合計点は、日本が有意に高値であり、特に、走能力に優れていた。また、運動習慣において日本の日頃の運動時間が多く、運動クラブへの加入率も高かったことから、今後、日本においても運動習慣の変化が生じれば、体力はさらに低下が生じる可能性が示唆された。(p:718) 著者：秋月茜、神林勲 (共同研究により抽出不可：研究デザインを構築し、主たる内容を執筆)
Comparison of Physical Fitness Among Three Body Statuses of Elementary School Children in Hokkaido Prefecture, Japan	共著	2013年10月	The 4th Pacific-Rim Conference on Education	本研究は、北海道における小学生3年生および5年生の肥満と体力・運動能力との関係を検討することを目的とし、肥満度から調査対象を瘦身傾向、標準および肥満傾向の3群に分類した。体力・運動能力の測定は文部科学省準拠新体力テストを行った。その結果、北海道における小学校3年生および5年生ともに、肥満傾向という体格が敏捷性や全身持久力、スピード、パワーを低下させることを示した。(pp:152~153) 著者：Akane AKIZUKI, Nobuhiro ISHIZAWA, Suguru KAMIIE, Rio NAKAMICHI, Noriteru MORITA, Tomoyasu OKUDA, Noriyuki SHIDE, Masatoshi TAKAHASHI, Satoru IWATA, Shohei YAMAGATA, Jun ASAKURA, Hitoshi MIZOGUCHI, Satoshi NARAYAMA, Toshihiro NAKAJIMA, Isao KAMBAYASHI and Hisashi SHINKAIYA (共同研究により抽出不可：研究デザインを構築し、主たる内容を執筆)

研究業績 (過去3カ年分)				国際的活動の有無	社会的活動の有無
著作数	論文数	学会等発表数	その他		
0	7	7	2	0	0

学 内 運 営 業 績

1 役職、各種委員会等 (主要10件程度)	2019年4月～現在	教務委員会 委員
	2019年4月～2021年3月	情報ネットワーク運営委員会 委員
	2019年4月～現在	FD委員会 委員
	2020年4月～2021年3月	入試・広報委員会 委員
	2021年4月～2023年3月	図書委員会 委員
	2021年4月～2023年3月	広報委員会 委員
	2021年4月～現在	自己点検・評価委員会 作業部会

学 外 活 動 業 績

1 本学以外の機関(公的機関・民間団体等)を通しての活動 (主要10件程度)	2019年	ランニング学会奨励賞
	2020年4月～	深川市保健福祉施策推進協議委員
2 学会・学術団体等の活動 (主要10件程度)	日本体力医学会	会員
	日本体育・スポーツ・健康学会	会員
	日本発育発達学会	会員
	北海道体育学会	会員(事務局会計：2021年4月～2024年3月)
	EUROPIAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE	会員